

『日本の長い戦後 1』

2017年10月10日

米国ポートランド州立大学客員教授で、社会学者の橋本明子氏の著作を山岡由美氏が翻訳し、『日本の長い戦後』という表題で出版している。原題は『The Long Defeat（長い敗戦）』である。日本の敗戦を今も引きずっている社会状況を表している表題である。精神的な重い後遺症を「トラウマ」と言うが、橋本氏は、トラウマは精神医学上の個人的な現象だけでなく、文化的、社会的な意味合いを含んでいると言う。

アジア太平洋戦争において、アジアで3,000万人近い人々の命が失われ、莫大な文化的、文明的な破壊をもたらした。この戦争は個人的な、また、文化的、社会的なトラウマを生み出し、負の遺産を背負わせた。トラウマを克服すべく、諸々の試みがなされてきたのが「長い敗戦」であった。それが「歴史認識問題」として取り上げられてきた訳である。

橋本氏は「英雄」「被害者」「加害者」の三種類の語りで、歴史を捉え、トラウマの克服を目指したと言う。「英雄」は、戦争を勇敢に戦った語りで、英雄たちの犠牲が平和と繁栄をもたらしたと受け止める。戦艦「大和」は、勝算のない特攻に等しい出撃作戦を敢行し、無残に撃沈された。21歳の臼淵巖大尉は、沈没しようという時「進歩のない者は決して勝たない。負けてめざめることが最上の道だ」と呼びかけた。この英雄的な言動が、戦後の平和と繁栄を実現したと言い、国家の開戦責任や敗戦責任から注意をそらし、美しい国の語りにしている。「被害者」は、戦争と敗戦による被害者の語りで、殺戮と破壊に対する嫌悪が道徳的基盤になっている。この語りは他者の苦難から目をそらし、悲劇の国という認識になっている。中沢啓治氏の自伝『はだしのゲン』は反戦文学の代表に位置づけられ、原爆が投下された広島で必死に生きる少年と家族の姿を描き出し、感銘を与えている。しかし、原爆投下を喜ぶアジア諸国の人々がいたことを伝えてはならず、残酷な戦争の犠牲になった日本人の物語に終始している。「加害者」は、戦争を中国、朝鮮、東南アジアへの加害と捉える。過ちを反省する道徳的基盤に立つ語りである。家永三郎氏は教科書問題を巡り、国家を相手取り、史上最も長い裁判闘争を展開した。戦争中、傍観者であったことに忸怩たる思いで、「15年戦争は、日本国家の不正不道徳な目的と手段によって開始された不義無謀の戦争であり、戦争を開始したのも、早期に終結しようとしなかったのも、ともに国の不法不道徳の行為であった」と、国家の罪と責任を問い続けた。東アジアとの和解と協調を目指す市民運動や友好団体を生み出している。

橋本氏は、これら三様の語りが錯綜する中で、「ナショナリズム」「平和主義」「国際協調（和解）主義」の三つに整理し、国民的アイデンティティを構築する必要があると説いている。「ナショナリズム」は、国家主義を唱え、日本の伝統文化に回帰する、日本第一という概念である。長い戦後からの回復は、烙印された歴史認識を修正し、国力を高め、軍備を持つ憲法改定に向かう。「平和主義」は、9人の文化人の「平和憲法を守ろう」というアピールに応え、全国に7,500もの「九条の会」が誕生したが、このような市民を中核にした平和運動などに見られる思想である。民主的選択に支えられた立憲平和主義で、長い戦後からの道義的回復を象徴している。「国際協調（和解）主義」は、敵対関係にあった近隣諸国との対話を通じて、互いに尊重し合える関係を築くことを重視する理念で、共通歴史教科書を作ろうと日中韓の研究者たちが模索した道である。

日本はどこにアイデンティティを求めるのであろうか。戦後のトラウマから解放されるために、新しい歴史を作る責任が国民一人ひとりに負わされている。